

* よどじん *

日が暮れた地域集会所の一室から、
和気あいあいと弾む会話がこぼれる。
「じゃあ、つぎは私の番ね。
はい、コレは何と言っていますか?」
時計回りの順番が回ってくると、
巧みに手を動かして「見る言葉」を作りだす。

今月のよどじんは、
手話サークル「葦」の

こ ばやし まさ こ
小林 正子さん



手話って、楽しい!!

小林さんが手話を始めたのは今から30年ほど前のこと。子育てが一段落し、何か新しいことを始めたいと思ったのがきっかけだった。以前から障がい者のサポートに関心があり、手話か点字のどちらを学ぶか迷っていた。目に飛び込んできたのは手話講習会の募集記事。すぐに申込み、講習会に通い始めた。

初めて体験した時の感想は「手話って楽しい!」だった。そして、1年間の講習会だけでやめてはもったいないと、サークルへの参加を決め、さらに、週1回の活動だけではもの足りないと、自力で勉強会も立ち上げた。

何年でも待つから あなたが手話通訳者になって

始めの内はなかなか伝わらなかった小林さんの手話が、経験を重ね少しずつ通じるようになってきた頃、聴覚障がいのある友人から、分岐点となる言葉をかけられた。「何年かかってもいいから、ずっと待っているから、あなたが手話通訳者になって」。その一言で、小林さんは手話通訳者を志すようになる。

以降、何年も何年も勉強を続け、大阪府の登録試験に見事合格。言葉をかけてくれた友人とともに大きな喜びを分かち合った。

通訳者は「影」の存在

手話通訳は、聴覚障がいのある方が情報を得るための重要な役割だが、あくまでもその存在は「影」、と小林さんは話す。「主体は誰なのか、通訳者が主役になってはいけない。厳しく教えられました」。

向かいのホームの友達とも 会話できるんですよ

聴覚障がいのある方には読み書きが苦手な人も多く、話し言葉で伝えても誤解が生じたりと、手話の奥深さ、難しさが存在する。でも、勉強すればするほどその魅力は尽きない、と小林さんは話す。「手話は映像であり、見る言葉。たくさんの情報をシンプルに視覚で届けることが出来ます。駅で声が届かない向かいのホームにいる人とも、手話なら会話ができるんですよ。意外と便利でしょ」と笑みをこぼす。

淀川区から育てる

現在、サークルには共に30年以上活動してきた仲間がいる。手話の楽しさを知ってもらい、一人でも多くの通訳者を淀川区から育てることが現在の夢。「初心者の人でも難しく考えずに『手話ってどんな?』という興味だけで良いから、まず第一歩をふみ出してほしい」。

次世代育成という大きなテーマ。それに向けて、手話の魅力を広く伝えるために、小林さんの活動は続いていく。

手話は映像 見る言葉。

手話サークル「葦」

手話の好きな仲間が集い、一緒に楽しく勉強やおしゃべりをしています。

設立：昭和57年4月 会員数：25名
主な活動：聴覚障がい者の行事参加、通訳、
手話講習会の運営
モットー：明るく、楽しく

